9 月 15 日の説教要旨　　「神の家族となるために」　　山本一牧師

エフェソの信徒への手紙　3章14～21節

●日本の演出家で、小説家でもあった久世光彦さんは次のような言葉を述べておられます。*「家族を思って心和む人、胸の痛む人、それはちょうど半々だと私は考える。力を得る人、失う人、それも半々だと思う。親孝行、兄弟思いの美談は数限りなくあるが、それと同じ数だけ親殺し、兄弟殺しの話が『聖書』の昔からある。家族というものは、いつもこの半々の危うさの上に揺れながら、それも激しく揺れながら立っているものだ。」*

家族関係には危うさがあるからこそ、人は家族を、当然のようにそこに『ある』ものと考えるのではなく、神への祈りとキリストの愛を持って、それを育むことを求めていかなければならないのだと思います。

●旧約聖書には「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」という言葉が度々出てきます。「神である」ではなく「神となる」と言われているのは、旧約聖書の民たちが、初めから神の民だったのではなく、失敗や弱さを曝け出しつつも神に寄りすがって生き、その赦しと愛に深く触れていくことを通して、本当の意味で神の民、神の家族となっていった歴史を示しています。そして新約聖書はイエス・キリストというお方によって　神様が本当に私の神となり、私たち人間が神の民とされるのだと告げているのです。

●今日のエフェソの信徒への手紙は、異邦人とユダヤ人が一つの「神の家族」とされていた紀元 1 世紀の教会に向けて書かれた手紙ですが、ユダヤ人と異邦人が同じ家族とされるという事にも絶え間ない祈りが必要であったようです。

ギリシャ語で「家族」という言葉は「パトリア」で、それは「パーテール（父）」という言葉に由来しています。家族は父親によって一つにされるという考えから生まれた言葉です。今日の祈りの言葉は、皆、人生の旅路の中で父なる神の聖霊の力でキリストの愛を日に日に深く知さられ、心のうちにキリストを迎える事によって様々な違いを持った私たちが共に一つの神の家族とされるように願い求める切なる祈りの言葉です。

●カンヌ国際映画祭のパルムドールを受賞した是枝裕和監督の映画「そして父になる」では、いくら「今日からお前の親だ」と言われても関係性が無いところで子どもは「父」とは呼べず、いかに子どもと時間を共有し、子どもの声に耳を傾け、共に笑い、泣き、喜びや悲しみを共有できるか、そこに父親が本当に父親に「なっていく」という道があるのだというメッセージが込められています。

聖書に証された神は「私はあなたの神だ」とう言うだけでなく、その証しとなる愛と恵みを日々注いでいてくださるお方です。そしてその愛と恵みはイエス・キリストによって私たちに示されていることを日々思い起こしつつ、共に神の家族としての教会を築いてまいりましょう。